

(2) 大学の理念・目的等

大学・学部等の理念・目的・教育目標とそれに伴う人材養成等の目的の適切性（A群）

同志社女子大学は、新島襄の先駆的な女子教育への情熱に基づく女子塾を起源とし、創立以来、良心教育を柱とするキリスト教の精神に基づく人格教育、リベラル・アーツ教育、国際主義教育を核にすえ、その実現に向けた教育研究活動を実践している。すなわち、「良心を手腕に運用」して「キリスト教主義に基づき、世界的視野で主体的に考え行動」し、「国家から個人に至るまで、国際社会を構成する一員であることを自覚して、文化、経済、外交面にわたる国際交流を推進しながら国際社会に貢献し、その結果として国際社会における地位を高めること」のできる女性の育成につとめてきた。

この建学の精神および基本理念に基づき、時代や社会の要請に応じた教育を行い、いずれの学部学科においても、専門分野に関わる識見と幅広い教養とを身につけさせ、多様な進路に柔軟に対応できるバランスのとれた女性を社会に送り出してきた。

(ア) キリスト教主義教育

新島襄は同志社設立の目的について、明確に述べている。

「吾人は敢て科学文学の智識を学習せしむるに止まらず、之れを学習せしむるに加へて、更に是等の智識を運用する品行と精神とを養成せんことを希望するなり、而して斯くの如き品行と精神とを養成するハ、決して区々たる理論、区々たる検束法の能く為す所に非ず、実に活ける力ある基督教主義に非ざれば、能はざるを信す、是れ基督教主義を以て、我か同志社大学徳育の基本と為す所以ん、而して此の教育を施さんが為めに、同志社大学を設立せんと欲する所以んなり」

新島襄による同志社創立の翌年に発足した本学においても、上記の目的同様キリスト教の精神に基づく人格教育は、本学の建学の精神および基本理念として幾多の困難を乗り越えて脈々と受け継がれて来ている。現在においても本学では、「聖書」の授業でキリスト教や創立者について直接学ぶとともに、毎朝の礼拝において正課の授業では得られないひとときを過ごし、卒業後も忘れ得ない心の糧を得ている。このように同志社は、キリスト教主義教育を根幹に据えた全人教育によって幾多の人格を陶冶し、「一国の良心ともいうべき人材」を数多く輩出してきている。

本学におけるキリスト教主義教育は、必ずしも狭義のキリスト教教化主義を意味しない。本学のキリスト教主義教育の根幹は、キリスト教の思想と宗教それ自体に含まれている自由と自治、愛と平等の精神を教育の中に確実に反映させ、気高い品性と良心を備えかつバランスのとれた人間性を養い、神を愛し隣人に仕える心を育む全人教育・人格教育にある。

このようにキリスト教主義教育は、本学の基本理念の根幹をなすものであるが、今一度原点に立ちかえり、知識技能を生かせる人格教育、徳育の重要性について、本学の教育理念である

国際主義教育、リベラル・アーツ教育とともに、本学の教育研究活動の中に具体的に生かされているかを顧みる必要がある。

キリスト教主義教育では、学生をキリスト教教化の対象とするのではなく、人格的個人として尊重し、大学教育の場における「よき隣人」として遇することが求められているのである。建学の理念は「教える」ことにおいてではなく、「実践される」ことによって浸透し、その中で本学の学生がやがて、他者を愛する主体としての自己を確立し始めることである。

カリキュラムにおいては、必修科目の『聖書』をはじめ「キリスト教関係科目」などを通じて、キリスト教的価値観が広く学生間に熟知され、さらに学科科目においてもこれに関連した科目が設置され、学問的な批判検証を通じて正しく理解されることに努めている。

一方で、礼拝を中心とする宗教教育活動は、建学理念を精神や知性において理解するだけではなく、感性や身体性においても具体的に、しかも隣人的共同性において理解するためのものであることが望まれる。本学のキリスト教教育においては、授業等と課外活動とが相互補完的な役割を担っているのである。

（イ）国際主義教育

本学における国際主義教育は、今から 130 年前の同志社の創設時からすでに実質化されていた。本学設立時はもとより、その後のアメリカン・ボード、米国ニューイングランドの婦人宣教師組織との関わり、さらに女子大学として発足した当時の初代学長ヒバードが苦難の基礎作りを遂行したことなど、同志社女子大学は成立および沿革とも国際的な経緯を持つものであり、国際主義的体質をもって生まれ育ったということが出来る。創立者新島自身が、およそ 10 年にも及ぶ研鑽とその間明治新政府の岩倉視察団に同行して欧米各国の教育事情を視察したことは、帰国後の同志社の創設に多大のモチベーションを与えたはずである。自由・自治の精神をもって個性的、主体的な生き方を模索し「良心を手腕に運用」しうる人物を養成する、という新島の教育への理想は、往時の日本社会に於いて依然として残っていた封建的な思考の枠組みから人間を解放し、グローバルな視点から世界を俯瞰することのできる人材の育成を視野に置いていた。独善や偏見に陥ることなく、民族や宗教、歴史や文化の違いを乗り越えて、相互に理解し合い共生への可能性を探ること、ここに国際主義教育の原点がある。国際主義は、国家から個人に至るまで、地球全体の国際社会を構成する一員として、文化、経済、外交面において海外との交流を推進しながら国際社会に貢献し、その結果として国際社会における地位を高めるものである。大学では少なくとも海外のさまざまな実状とその歴史的、社会的背景を学び、同時に我が国の文化を海外に発信するための基礎作りを行わなければならない。

また、同志社女子大学が京都に位置していることを考えると、我が国の文化の中心であり続けた京都について多角的に学ぶことが重要である。京都という個別地域の歴史や文化の研究は、国際交流の場において文化の普遍性が論じられる場合でも必須条件となるからである。

グローバリゼーションの進展がさらに加速する中であって、国際化時代を担う人材の育成及び地域の国際化の推進という、高等教育機関である大学の目的・意義については、本学の「国際主義」教育とまったく一致し、将来はさらにその重要性を増してくるものと考えられる。つ

まり、本学が設立された当初から掲げてきた「国際主義教育」は、19世紀から21世紀に変わった現在においても、将来においてもますますその重要性が高まっていくと考えられる。

(ウ) リベラル・アーツ教育

同志社女子大学のリベラル・アーツ教育は古く創設時に端を発する。それは本学の教育の一部をリベラル・アーツが占めているというより、大学自体がリベラル・アーツの教育機関として誕生したといえるものであった。同志社社長、新島襄の女子教育機関設立を目的とした「同志社分校女紅場開業願」に対し、1877年2月、京都府は勸業課の意見を聞き「女紅場」の名を変更して「女学校」とするようにと回答した。つまり、京都府の考える女紅場は勸業授産機関であるが、新島の提出した「開業願」は「婦女子ノ才芸知識ヲ開達スル主意」に基づくものであるから「女紅場ノ名称ヲ転シ女学校」であるとの回答である。事実「開業願」に記されている学科科目は技芸に関わるものは11科目中1つ、裁縫があるばかりであった。

この背景には、新島の学んだアメリカ、ニューイングランドのアーモスト大学がリベラル・アーツ大学であり、岩倉全権大使とアメリカの教育制度を視察調査した当時のアメリカのカレッジが圧倒的にリベラル・アーツ教育であったことが、同志社女子教育を単なる女性の実業的教育機関にとどめなかった理由である。これは同時に新島だけの願いにとどまらず、リベラル・アーツ教育を受けたアメリカ婦人宣教師たちの望みでもあった。彼女たちの多くが卒業したアメリカの最初の女子大学でありかつリベラル・アーツ教育を行う大学であったマウント・ホリオークは日本の女子教育に大きな影響を与えたといわれている。つまり、このように同志社女学校は設立時からリベラル・アーツの教育機関として出発した。

時代を経て、女学校拡張の方針においてもリベラル・アーツの軸は変わらなかった。1912年、専門学校令による同志社女学校専門部になるに及んでその精神を「家政科及英文科は寧ろリベラルの教化を授けんとするのであるから、自然科学よりも精神科学を教ふる必要がある。…女子の知能を開発し品性を向上せしむるには、是等精神科学を授けねばならぬ。」とうたった。すなわち、「精神科学は心の働き或いは心の働きからでる世の中の種々の理学を研究する学問で、倫理、心理、民族心理教育、児童研究、哲学、美術史、法則及び文学歴史の如き学問で。」とリベラル・アーツの骨格に精神科学をすえて強調したのである。1930年同志社女子専門学校となり、やがて戦後を迎えた。

戦後、1949年に新制大学として、名を同志社女子大学、英語名を Doshisha Women's College of Liberal Arts と改めた。ここにきて初めて、本学はこれまでのリベラル・アーツ教育の伝統を大学名に表明すべく、“College of Liberal Arts”と看板に掲げたのである。それは専門教育偏重に陥らず、全人格教育を目的とした新たな決意表明であった。その目的は次のように記されている。「本大学は、教育基本法及び学校教育法に基き学芸の大学として学術を教授研究すると共に明確に思考し有効に思想を発表し諸種の価値を判断識別する能力を育成しあはせてキリスト教の理想に遵ひ、円満な人格を涵養すると共に、国際的民主主義社会に於て建設的に且つ責任をもって生活し得る女性の養成を目的とする。」

この Liberal Arts 大学に設けた学部の名称については、これを「教養学部」ではなく「学

芸学部」とした。それは師範学校が学芸学部を用いる以前のことであった。そしてカリキュラム作成において、『ヒューマン・リレーションズ(人間関係)』という必須科目を置いたが、これは学生たちに家族、学校、社会に対してどのように関わって行くべきかについて、教える者、教えられる者がともに考え合うといった、当時としては画期的、独創的な教育プログラムであった。これも日本で最初のものであり、同志社女学校専門部の精神科学を教えるとうたった流れが具体化された科目であった。

現在の本学におけるリベラル・アーツ教育は、学部学科等の専門科目と全学共通科目としての「共通学芸科目」、「キリスト教関係科目」、「外国語科目」、「スポーツ・健康科目」との有機的結合により教育課程が編成されていることで実現されている。この本学の教育課程の特色は、専門科目と全学共通科目の各科目区分ごとの最低卒業必要単位を低く抑え、本学他学部学科の科目や同志社大学、大学コンソーシアム京都等他大学との単位互換による科目といった幅広い選択肢の中から自分の興味や関心に基づいて履修できるシステムとなっている。1996年度の自由学芸教育研究センター(旧一般教育)所属教員の学部学科への分属により、「すべての専任教員は、学部・学科の科目と自由学芸科目について責任を持つ。」さらに「すべての専任教員は、学部・学科(教授会)に属するとともに、考え方として、全学LA(教授会)に所属する。」と「1996年度からのリベラル・アーツ(自由学芸科目)領域の責任体制について」で決定され、今では「共通学芸科目」と名称を変更し、全学の専任教員が中心となって担当し、運用されている。

高度に専門化された学問の領域が、極度に細分化され、限度なしに特殊化されていくなかで、今日改めて大学教育の本質が問われつつある。専門分野の知識や高度な技術を教育の領域において涵養することは重要であるが、大学教育が特殊化、細分化されるあまりその中から人間存在そのものへの意味づけや探求の問題が欠落してしまってはならない。価値の混迷の時代、不確実性の時代を生きる現代人への何らかの意味での指標を提示する課題が、教育の中に問われている。

本学のリベラル・アーツ教育は、あくまで人間をトータルに捉え、研ぎ澄まされた英知と豊かで幅広い教養に裏付けられた、奥行きのある高潔な人格を陶冶することをもって、その主旨とするものである。本学におけるこうしたリベラル・アーツ教育の主旨をより確実に実現するために、今後とも一層邁進していかなければならない。

この3つの教育理念を柱として、同志社女子大学学則第1条「本学は、教育基本法に基づき、学校教育穂の定める大学として学術の教授研究を行うとともに、キリスト教の精神にしたがい、円満な人格を涵養し、国際的視野に立って建設的に、かつ責任をもって生活し得る女性を育成することを目的とする。」により規定している本学の人材育成等の目的は、高等教育機関である大学として適切である。